キェルケゴールの魅力
―日本語によるキェルケゴール研究―

桝形　公也

キェルケゴールの魅力とは、と改めて問われると、どう回答すべきか正直戸惑いを感じざるを得ない。現在、キェルケゴール研究が日本では下火になり、ある意味、このような問いによって、本キェルケゴール協会の存在意義が問われているのかもしれない。日本でキェルケゴールが研究されてきてからかなりの歴史があるが、確かに、今日のようにキェルケゴール研究の数が少なくなっている状況はなかったと言えるかもしれない。しかし、この傾向は1970年代以降、哲学の関心が大きく現象学へと向かった時から始まっていた。そして、80年代に生命倫理学が日本に導入されてから、その流れは決定的となった。若い研究者でキェルケゴールを研究する者が圧倒的に減少したからである。また、キェルケゴールの場合、その研究には圧倒的な困難がある。それは何と言ってもデンマーク語である。哲学思想系を開設している大学でデンマーク語を教授している大学は皆無という現実の中で、キェルケゴールを原語で読むことが非常に困難である。日本の研究事情では、海外の思想は原語で研究するというのが建前になっているので、若い研究者がキェルケゴールを研究するには現状は絶望的である。

私がキェルケゴールという思想家の名前を知ったのは、大学の2回生の時。その名前を知るのは少し晩熟だったかもしれない。いろいろ思い悩んでいた時、大学の恩師である森口美都男先生に『死に至る病』の読書を勧められたのであった。そしてとにかく岩波文庫の『死に至る病』を購入して、読み始めたものの、全くと言っていいほど理解できなかった。何よりも、絶望の諸段階のうち、自分はどのレベルなのだなどと考えさせられば考えさせられるほど、余計「絶望」に陥るだけだった。卒業論文では、キェルケゴールに多少は触れたものの、も

ちろんキェルケゴール研究などと呼べるものではなかった。

大学院に進学し、デンマーク語も本格的に勉強し始めたが、正直テープで聞いたデンマーク語にはがっかりした。あまりにも暗いイメージだったからである。口を開けて発音しているのだろうかという印象であった。母音の数が非常に多く、例えば、同じaでも実に様々な発音を持っていることにはびっくりした。キェルケゴールも暗い、そしてデンマーク語も暗い、何か本当に憂鬱な気分に陥ったことを思い出す。後にコペンハーゲンで地元の合唱団の合唱を聴く機会があり、その時に初めてデンマーク語の響きの美しさに触れることになったが。

自分の気分の思い入れでキェルケゴールを読むという態度が克服されたのはかなり後になってからである。それは哲学史の知識が、特にギリシャ哲学史の知識が増えていったことと対応していた。特に、『不安の概念』を読む過程で、キェルケゴールとアリストテレスとの関係に関心を抱くようになり、修士論文でキェルケゴールの可能性の概念をテーマに選んだことが大きい。もっともキェルケゴールの可能性の概念の多様性のために、この修士論文は、結局まとまりのないものとなってしまったが。

学問的には倫理学を専攻してきた私にとっては、キェルケゴールとアリストテレスの関係は非常に重要なものとなっていった。特に言葉と倫理との関係、言い換えれば、倫理的な領域の独自性や倫理的なものの伝達というテーマに関して、両者の考え方には非常に近いものがあると考えるようになった、というよりも、キェルケゴールはアリストテレスからこれらのテーマに関する大きな示唆を受けたと考えざるをえなくなっていったのである。その中でも、キェルケゴールの概念のStemningがギリシャ語のἦθοςやἠθικὴ ἕξιςに対応するのではないかということ、また、これらの2つのギリシャ語が語源的に、キェルケゴールのTilegnelseという概念に対応している発見であった。

当時の私のノートから引用させてもらうと、「アリストテレスは『ニコマコス倫理学』でἀρετήをδιανοητικὴ ἀρετήとἠθικὴ ἀρετήとに分類しており、『詩学』においても劇の構成要素としてδιάνοιαとἦθοςを挙げて、διάνοιαに対しては、それらの登場人物が言葉に出して或ることを論証したり、めいめいの見解を表明したりするさいのよすがとなるもの、このδιάνοιαに基づく台詞には性格はな

いと規定し、他方ἦθοςに対しては、行為主体としての人間の倫理的特色がどんなものであるかを我々が主張するさいの根拠になることがらであり、選択（意向、動機）を言葉に出して明らかにしうる能力と規定している。また『弁論術』においても、善悪・美醜・正邪を論じる言述にはἦθοςが伴っていなければならないのに対し、数学的論証にはἦθοςはない、なぜならそこには選択がないからであると述べている。ἦθοςはドイツ語では、Wesensart, Charakter, Gemüt, Sitte, Haltung等々と訳され、ἕξιςはZustand, Befinden, Verhalten, Stimmung等々と訳されている。キェルケゴール自身は、ἦθοςをWesenと訳し、ἕξιςをChr. Garveに倣ってFertigkeitと訳し、自らはContinuitätと訳し、διάθεσιςをZustandとかStimmungと訳している。語源的にはἦθοςは「自己有化されたもの」の意であり、ἕξιςは持前、所持であり、いずれもφύσιςではなく、獲得されたもの、所有されたものの意をもっている。」

キェルケゴールはもちろん、倫理的な領域に固有な言語使用に注目するだけでなく、キリスト教的・宗教的な言語使用の独自性を追求した。しかし、ここで私が注目したいのは、倫理的な領域、あるいはキリスト教的・宗教的な領域に固有な言語の使用に対する鋭い感覚である。この事に注目していった場合、彼の言語理論は、ウィトゲンシュタインやメタ倫理学、さらにはオースチンなどの日常言語学派との近親性を持っているというのではないかということが浮かび上がってくる。私がまだ大学院生の頃には、このような発想は一種のタブーのような哲学史的状況ではあったが。

それはさておき、彼は、言語のもつ普遍的性格よりもむしろ、具体的な歴史的現実的性格に着目している。言語を使うものからすると、その主体的現実という側面である。言語は共通のものであるとともに、所与のものであり、具体的な歴史をおびたものである。例えば、私が語る日本語は、私の発明品でもなければ、私が勝手に変更を加えることが出来るわけではない。一方で私は日本語を語ることが出来なければ、私自身ではない。「文は人なり」とあるように、このような日本語使用そのものが私の個体性を形作るのであり、私の実存そのものとして自覚されるのである。

言語のこのような特質を考えたとき、キェルケゴールのコンテキストの中では、特にキリスト教的な言語が関心の中心であることは論をまたないが、そして、キリスト教の言語を語るときでも、彼自身は、自分の言語であるデンマーク語への自覚が非常に強かった。当たり前すぎで、何を今更ということではあるが、彼はデンマーク語で考え、語っていたのである。

例えば、上に挙げたデンマーク語のStemningは、日本語では通常「気分」と翻訳されているし、英語でもmoodと訳されている。しかし、デンマーク語のコンテキストの中では、もちろん、feeling, atmosphere, temper, spirits, moraleというような、感情や気分と関わる英語に訳されるだけでなく、先ほど述べたように、attitude, disposition, tendency, toneというようにも英訳される。さらにこのデンマーク語は、ドイツ語のStimmungがStimmeから派生してきたように、Stemme（声）から派生してきていて、その言語使用の範囲はドイツ語とオーバーラップしている。

またキェルケゴールと言えば、Existensという言葉が問題になるが、この言葉もデンマーク語の日常の使用と密接に結びついて、彼は自らの思想を展開していったのではないか。自分自身の存在の仕方への反省が、この言葉の独自の使用法へと展開していったのではないか。だからこそ、キェルケゴールの「存在」概念の区別は、本質主義的な伝統をもつヨーロッパの思想に大きな反省を促し、トマス・アクィナスの「存在」概念への新たな反省への契機ともなったと思われる。Existensは、日本語では、現在「実存」と訳されている。大谷先生は「実存在」と訳されているが、この訳の方はポピュラーではない。いずれにせよ、「実存」は新しい日本語としての地位を築いてはいると言えるだろう。医療の現場では、「患者を一人の実存として接する」というようなことが言われるが、これは明らかにキェルケゴールの思想の影響下にある。このようなことは、「主体性」とか「個性」という概念に関しても、言えることではないだろうか。

キェルケゴールは彼固有の述語の使用において、あるいは言葉の違いに敏感であった。これも研究者には周知のことであるが、いくつか例示したい。例えば、GjentagelseとErindringenとの区別である。率直に言って、日本語で「反復」と「想起」という二つの言葉を結びつけて考えるというようなことは考えられ

ないであろう。「受取り直す」という言葉と「想起する」という言葉であれば、日本語でも何とか関連をつけ易くなるかもしれない。具体的な言語というレベルで言えば、すでに現存する言語を自分のものにして、其の世界を生きるということであれば、「受取直し」であろうが、過去の言語の使用を思い出すということであれば、「想起」となろう。

キェルケゴールはまた「天才」と「使徒」との相違に言及している。彼によれば、両者は元来本質的に相違し、それぞれが固有の領域・質的な範疇に属しており、その生まれ故郷を異にする。「天才」はエステーティシュな領域に属し、「使徒」は逆説的 - 宗教的な領域に属する。前者は内在的、直接的な自然 - 規定であり、後者は超越的、絶対的な規定である。もしも両者の質的差異が取り払われて、逆説的 - 宗教的なものがエステーティッシュなものへと引き戻されてしまえば、使徒は天才以上でも以下でもなくなる。

また、これは注意すべきことであると思うが、大谷先生は、Prædikener, Foredrag, Talerというキェルケゴールの用語の差異を論じている。そして彼は、Prædikenerを「説教」, Foredragを「講話」, Talerを「談話」と訳すように提案している。この区別も現在はほとんど日本では無視されてしまっていて、Foredrag も Talerもともに「講話」と訳されている。大谷先生の言葉を引用してみよう。「Taleを「談話」と訳してなぜ「講話」と訳さないかと言うと、キェルケゴールが「講話」に当る言葉Foredragを別に用いているからである。時には“ Prædikener, Foredrag, Taler”（「説教、講話、談話）と三つの言葉を併置して区別している（cf. S. V. XII 257)。キェルケゴールがForedragと言うものは、宗教的な事柄に関する場合、話者がキリスト教教師の資格において説くものを指していると思う。」（『キェルケゴール研究』第17号、42頁）

「天才」と「使徒」との差異に関するキェルケゴールの論説、あるいは「説教」「講話」「談話」の差異に関するキェルケゴールの発言は、必ずしもデンマーク語に固有なものというものではなく、事柄そのものに対する鋭い反省ということかもしれない。しかし、例えば、『愛の業』におけるKjerlighedとElskovとVenskabの差異を論じる場合、キェルケゴールがデンマーク語を意識していなかったとは思われない。あるいは、キェルケゴールは、ギリシャ語のアガ

ペー、エロース、フィリア―に対応する語として、デンマーク語のKjerlighedとElskovとVenskabを意識的に用いたということになるのだろうか。ただ、デンマーク語でも、キリスト教の義務としての愛、つまり「汝愛すべし」という表現には、“du skal elske“という表現を用いて、この場合の「愛する」にはElskovの動詞形が用いられてはいるが。いずれにせよ、デンマーク語には、このようにギリシャ語に対応する言葉があったということが、キェルケゴールの愛の思想の展開を独自のものとすることを可能にしたのだとは言えまいか。

私は、キェルケゴールのExistens概念の紹介論文では、日本語の「ある」という言葉の意味連関に言及した。周知のように日本語の「ある」には様々な漢字が充てられている。そして、そのような「ある」の意味連関との関係で、キェルケゴールのExistens概念に光を当てたいと考えた。

また、キェルケゴールのTilegnelse概念とアリストテレスのエートスとの関係を論じた時も、二人の用いた言葉の語源的な意味が「自分のものにする」ということであり、「所有」ということと関係していることに注目した。そして、その際に、日本語の「もつ」という言葉の意味連関に注目して、Existens概念の論究の場合と同じように、この「もつ」の意味連関と関連させて、特にキェルケゴールのTilegnelse概念の分析をした。Tileignelseの日本語の訳を、その際は取りあえず、「自己有化」としたが、もちろんこのような日本語はない。日本語としては「身につけること」「体得」ということの方が分かりやすいかもしれない。冗長かもしれないが、「自分のものとすること」とした方がいいかもしれないが、これでは哲学的な術語としては適切でないかもしれない。いずれにせよ、私にとって何よりも「身につける」べきものは、「言語」そのものであるという意識を強く持った。

私のこのような研究態度は、必ずしも自覚的であったとは言えないかもしれない。しかし、キェルケゴールの「愛」の概念を紹介するときには、はたと困ってしまった。単純に日本語で「愛」とは何だろうかという疑問が私を虜にしてしまったからである。取りあえずは、Kjerlighedは「愛」、Elskovは「恋」あるいは「恋愛」、Venskabは「友愛」と日本語訳をつけたが、これら三つの言

葉は、日本語なのであろうか、はなはだ疑問に思わざるを得なかった。結局、日本における「愛」の歴史というものを考察せざるを得なくなり、その過程で同じように西洋における「愛」の歴史をも探究することになってしまった。そして、日本における男女の「色恋」の在り方、明治以降のラブの受容史などを繙き、ギリシャ神話におけるメーデイアの物語や、ゲルマンの「ニーベルンゲンの歌」などの反省から、キリスト教の愛には、「愛の精神化」とでも呼べるStemningが存在すると考えるようになってきた。私の言う愛の精神化とは、愛という現象の男性による支配の貫徹ということであるが、キェルケゴール自身のレギーネへの関係もそのような流れの中で解釈することが可能ではないかと考えるようになってきている。

私は何度か、ヨーロッパのキェルケゴール研究者から日本ではなぜキェルケゴール研究が盛んなのかという質問を受けた。本論の冒頭でも述べたように、現在は日本におけるキェルケゴール研究の文献数は少ないが、世界でも最も文献数の多いと言える時期もあった。このような現象は、ヨーロッパの人たちにとって、仏教国あるいは少し日本の文化を知っている人にとっては神道の国である日本でなぜキェルケゴールが人気なのかは理解しがたいことなのであろう。

日本におけるキェルケゴール研究の特徴には、特に明治以降、西田幾多郎、田辺元、西谷啓治といった京都学派と呼ばれる哲学者が、自らの思想の展開に於いてキェルケゴールの思想を利用した、それもかなりの共感を持って利用したということが挙げられる。また、キェルケゴールと法然、親鸞、道元などに代表される日本の仏教思想家との関係を論じたものがあるということも特徴として挙げられよう。特に後者の特徴の場合、キェルケゴールがヨーロッパの思想家たちと関係づけられて研究されるのとは様相を異にするであろう。

日本の思想とキェルケゴールの思想とがこのように比較対照されるのに対し、プラトンやアリストテレス、デカルトやカントと日本の思想との関係を論じたものはほとんどないであろう。それはいったいどうしてなのであろうか。また、日本の思想とキェルケゴールとの関係を論じることによって、どのような思想史上の可能性があると言えるのだろうか。

丸山真男は「歴史意識の「古層」」という論考で、記紀神話の冒頭の発想を歴史意識の「古層」と呼び、そのなかから「なる」、「つぎ」、「いきほひ」を基底範疇としてとり出し、こっらの基底範疇が日本の歴史叙述、日本の思想史の根底に流れ続けている「執拗な持続低音」（basso ostinato）であるとして、これらの基底範疇が儒教や仏教の影響を受けつつも、独自の展開をしてきたということを説得的に論じている。

この拙論との関係で言えば、三つの基底範疇の内でも、もちろん「なる」を取り上げなければならない。丸山は、宣長に言及しながら、「生・成・変・化・為・産・実」などがいずれも昔から「なる」と訓ぜられ、それらの意味を包含してきたということは、たんに日本語の未分化とか、漢字の本来の意味への無関心というだけでは片附けられない。古代日本人にとって、これらの意味すべてを包含する「なる」のいわば原イメージがあったのではないか。さらにいえば、生誕・所生を意味する「生(な)る」はまた、「生(あ)る」とも訓ぜられ、今度は「ある」というコトバについて見ればそれはまた存・有という字にも適用され、他方で、これまでかくれていたものが顕在化するという意味での「現(あ)る」にも通じている（現人神(あらひとがみ)の「現」）。こうした漢字の使用法は、たんに無法則な流用ではなくて、やはりそこに発想の一定の傾向性が潜んでいるのではなかろうか。とくに当面の対象とする記紀神話では、（中略）漢字の意にかかずらって、コトバを選択、もしくは造成しているような面もあるように思われる。」（『忠誠と反逆』ちくま学芸文庫、163 - 164頁）と書いている。

このような文章は、私には即座にアリストテレスの運動概念を思い起こさせる。アリストテレスは範疇の相違に応じて、この運動を「生成 - 消滅」、「増大 - 減少」、「質的変化」、「場所的変化」と分類し、これらの運動を可能性から現実性への変化としてとらえている。そして、キェルケゴールはアリストテレスの運動の考えを人間の実存を説明する。

もちろん、日本語の「なる」も、アリストテレスの「運動」も、キェルケゴールの可能性概念あるいは実存概念も、基本的な発想母胎は異なっている。しかし、それらの発想を比較検討する価値は大いにあるのではないか。

我々は、日本語を以てキェルケゴール研究をなすのであるから、他の国の言

葉で彼を研究する事とは違った視点を提供できるという考えに私は強く捉われるようになってきている。このことが、日本におけるキェルケゴール研究の魅力なのではないだろうか。このことは、世界のキェルケゴール研究に一定のインパクトを与える可能性が大きいし、日本の思想の状況を反省するうえでも有意義であると考える。

Kierkegaard Made in Japan というような皮肉を込めた著作が出版されているが、むしろ我々はそれを逆手にとって、日本でしかできないキェルケゴール理解を提示するということこそが、我々にとってのキェルケゴール研究の魅力ではなかろうか。Christianity made by Kierkegaardが、とてつもない魅力を秘めているように。

附記

大西祝は渡欧中の明治32年（1899）5月6日、ライプチヒから大塚保治に書簡を出し、そのなかで「此頃は少しくヘンテコなる方面なれど、KierkegaardのEntweder-Oderなど時々繙き居り候。頗るgenialなる事は爭はれずと存候」とキェルケゴールに言及している。この現物の所在は不明であるが、大正3年（1914）2月発行の『心の花』第18巻2号所収の「大西祝博士書簡」（42頁）で確認できる。これは、『大西祝・幾子書簡集』教文館、1993年、139頁にもあり、鈴木範久は『内村鑑三目録7、1903~1907　平和の道』（教文館、1995年）でこの手紙のことを紹介している（260頁）。大塚保治は5月12日付けで、この大西の手紙への返事を書いている。この書簡では、「Kierekegaardの思想はIbsenなどに餘程影響を與へしと聞及候へば、是非研究し度しと思へども、まだ思ひしのみに候。序ながらイプセン劇は已に御購讀被成候へしや。思索の御餘閑には屈竟のZeitvertraubenと察候。」と記されている（『大西祝・幾子書簡集』教文館、1993年、358頁参照。現物は早稲田大学図書館所蔵）。この資料は今まで紹介されていなかったので、この機会に紹介させていただく。